

課題番号 : 27指1403

研究課題名 : 東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究および被災児童の心的外傷後ストレス障害 (PTSD) に関する研究

主任研究者名 : 牛島洋景

分担研究者名 : 宇佐美政英, 岩垂喜貴, 稲崎久美

鈴木友理子 (国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所)

佐竹直子 (国立精神・神経医療研究センター病院)

キーワード : 東日本大震災, 外傷後ストレス障害, 前向き追跡研究, 連携システム

研究成果 : 本研究は東日本大震災に被災した石巻市の児童の、被災の経過を明らかにすること、外傷を受けた子どもへの標準的な治療を実施しその有効性を明らかにすること、地域精神保健ネットワークの構築をめざすものであり、2年目の研究成果概要は以下のとおりである。

【石巻市の被災児童の前向き追跡研究】健康調査の結果から、災害後の子どものトラウマ反応の継時的な変化を認め、2年以内には改善傾向を示すことが明らかになった。また、震災後の子どもの優しさなどの向社交性も震災前と比較して変化がないことが明らかとなった。追跡研究でみられた変化が、経年変化なのか通常の発達的变化なのかについて明らかではない。そのため、同様な調査を非被災地である市川市で行った。小学生では被災地 (石巻市) でトラウマ症状の総得点が高く、中学生では被災地 (石巻市) と非被災地 (市川市) に差はなかった。朝食摂取率は被災地 (石巻市) で高かった。被災地では生活習慣の乱れがあり、被災地の外傷体験は小学生で高い傾向にあると考えられる。【被災地の保健行政からみた被災児童の精神保健に関する研究】メンタルヘルスに関して介入が必要な母子ケースの実態把握とフォローアップでは、子どものケースが12件、親のケースが1件、関係者会議に対するスーパービジョンが4件であった。高校生の相談ケースが5ケースあり、この年齢層に対する支援体制の検討が必要である。メンタルヘルスに問題を抱える児童のスクリーニングについては、修正版QCDを用いて785名に対してスクリーニングを行い、前年度までよりも高い値が得られた。母子のメンタルヘルスネットワークの構築について、石巻市子ども関係者会議と要保護児童対策協議会のケース会議に参加し、スーパービジョンを行った。【被災児童に発症する精神障害の有病率に関する研究】2校の中学校で構造化面接を行った。何らかの診断がなされる児童は330名中99名 (30%)。軽躁病エピソード、自殺の危険、広場恐怖は10%前後と多い。自殺念慮を持つ子どものリスク関連因子は抑うつ症状のみであった。PTSDの診断は5名 (1.5%) であった。【支援を行った被災児童の追跡研究】平成28年度「子ども支援関係者会議」は9回開催され、延べ16名 (8事例) について検討を行なった。本年度に検討した事例の特徴として次のようなことが挙げられた。①被災したのは8事例中2例で、1例は震災関連症状と考えられた。②機能不全家族からの事例では、複数回の検討を行った。③8事例中2例に知的障害、2例に発達障害を認めた。特別支援教育は未だ十分に整備されていないため、障害を抱える子どもたちの学ぶ環境整備が喫緊の課題であると考えられた。【外傷 (トラウマ) を受けた子どもの治療技法の有効性に関する研究】現在までにTF-CBTのIntroductory trainingの受講を完了した。Peer consultationを開始し、2回のWeb Consultationを行った。現時点で5症例を行っている (完了3例 中断2例)。

以上の結果については、9th International congress of Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (2017 Indonesia), 17th International congress of European Society for Child and Adolescent Psychiatry (2017 Geneva), 第58回日本児童青年期精神医学会 (2017 奈良) で発表予定。

Subject No. : 27-1403
Title : A prospective cohort study of children suffering from the Tohoku Region Pacific Coast Earthquake and a study about children with Post Traumatic Stress Disorder (PTSD)
Chief Researcher : Ushijima Hirokage
Assigned Researchers: Usami Masahide, Iwadare Yoshitaka, Satake Naoko, Inazaki Kumi, Suzuki Yuriko
Key Words : Tohoku Region Pacific Coast Earthquake, posttraumatic stress disorder, prevalence survey, prospective longitudinal study, support services for children

Abstract: This study was conducted as a prospective cohort study in Ishinomaki City. And we conducted a standard treatment for children with PTSD and examined the effectiveness of that treatment procedure. This study also developed a support system for the children in cooperation with Ishinomaki City. 【The Prospective Longitudinal Study】 From the result of health survey, we revealed as below : ①The symptom of PTSD were improved within two years. ②Children keep good fellowship with others such as kindness compared to before the Earthquake. We could not estimate that these changes are temporal or developmental. So we set up the same health survey in Ichikawa City where non-affected area. In elementary school, the extent of traumatic symptoms of children in affected area (Ishinomaki City) are higher than those of non-affected area. But in junior high school, there is no difference. The rate of eating breakfast is higher in affected area, but there is disturbance of life style in affected area compared to non-affected area. In affected area, the extent of traumatic symptom of elementary school children is higher than that of junior high school children.

【The survey of treatment for children with PTSD】 We had finished Introductory training of TF-CBT and provided Trauma Focused-Cognitive Behavior Therapy (TF-CBT) to five cases and three of them finished TF-CBT protocol. We carried out peer consultation two times.

【The Study for Mental Support Services Establishment】 In the research and follow-up to the mother and child who should be intervened, we executed 12 children cases and one mother case and we supervised 4 of them in the meeting. Five cases were high school students, so a support system for high school students is needed. We conducted screening of children with difficulty of daily life using revised version of QCD (QCD-R). 785 children participated in this screening. Mean scores of QCD-R were higher than those of last year's. To build up the mental health network system for children and mothers, we participated in "Child Supporters' Cooperating Conference" and "Conference for children in care" and supervised these meetings. 【Prevalence of mental disorder in children living in Ishinomaki】 We conducted structured clinical interview in two junior high schools. 330 children participated in this research and 99 of them were diagnosed with some sort of mental disorders. The prevalence rate of hypomania, suicide attempt and agoraphobia are about 10%. The prevalence rate of PTSD is 5%. Risk factor of suicide attempt is only depressive mood.

【Comprehensive Study】 We held "Child Supporters' Cooperating Conference" nine times in fiscal 2007 and discussed 16 cases (of 8 children). Through this meeting, we revealed as below. ①Two of 8 children affected by disaster and one had a disaster related symptom. ② For the case of defected family, we discussed more than once. ③Two of 8 cases had mental retardation and two had developmental disorder. It is necessary to prepare learning situation for such children, because there were few special educational support system in Ishinomaki City.

27指 1403 【3年研究 2年目】

東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究および被災児童の心的外傷後ストレス障害（PTSD）に関する研究

石巻市の被災児童の前向き追跡研究

- ① 石巻市の被災児童の前向き研究
健康調査を継続的に施行し、その変化を追跡。
- ② 石巻市の被災児童と健常児の比較研究
千葉県内で健康調査を施行し、被災児と非被災児の比較検討を行う。
- ③ 被災地の精神保健行政からみた被災児童の精神保健に関する研究
養育能力の低い家庭で育った子どもへの東日本大震災が与えた影響を検討し、その支援を構築する。
- ④ 支援を行った被災児童の追跡研究

石巻市の被災児童に発症する精神障害の有病率に関する研究

被災児童に構造化面接を行い、発症する心的外傷後ストレス障害(PTSD) といった精神障害の有病率とそのリスク要因を調査。

外傷（トラウマ）を受けた子どもの治療技法の有効性に関する研究

外傷への標準的な治療技法を施行し、その有効性を検討



期待される成果

- ① 被災児童、支援した子どもの経過を明らかにできる
- ② 被災児童に発症する精神障害の有病率、リスク要因を明らかにできる
- ③ 外傷を受けた子どもへの標準的治療を施行し、その有効性を検討する

27指 1403 【3年研究2年目】 平成28年度（研究2年目）成果

石巻市の被災児童の前向き追跡研究

- ① PTSSC-15を用いた調査から、災害後の子どものトラウマ反応は継時的な変化を認め、2年以内には改善傾向を示すことが明らかになった。結果については、9th Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry（2017年8月, Indonesia）で発表予定。また、SDQを用いた調査から親から見た震災後の子どもの優しさなどの向社交性も震災前と比較して変化がないことが明らかとなった（論文作成中）。
- ② 追跡研究でみられたPTSSC-15の経年変化が、通常の発達的变化なのかについて明らかにすることを目的とし、同様な調査を市川市で行った。小学生では被災地（石巻市）でPTSSC-15の総得点が高く、中学生では被災地（石巻市）と非被災地（市川市）に差はなかった。朝食摂取率は被災地（石巻市）で高かった。被災地では生活習慣の乱れがあり、被災地の外傷体験は小学生で高い傾向にあると考えられる。
- ③ メンタルヘルスに関して介入が必要な母子ケースの実態把握とフォローアップでは、子どものケースが12件、親のケースが1件、関係者会議に対するスーパービジョンが4件であった。高校生の相談ケースが5ケースあり、この年齢層に対する支援体制の検討が必要である。メンタルヘルスに問題を抱える児童のスクリーニングについては、修正版QCDを用いて785名に対してスクリーニングを行い、前年度までよりも高い値が得られた。母子のメンタルヘルスネットワークの構築について、石巻市子ども関係者会議と要保護児童対策協議会のケース会議に参加し、スーパービジョンを行った。
- ④ 平成28年度「子ども支援関係者会議」は9回開催され、延べ16名（8事例）について検討を行なった。本年度に検討した事例の特徴として次のようなことが挙げられた。①被災したのは8事例中2例、うち1例は震災関連症状と考えられた。②8事例中4例で親に精神疾患があり、1例に深刻な貧困があった。8事例中3例は母子家庭。これらの機能不全家庭の事例は、「子ども支援関係者会議」で複数回の検討を行った。③8事例中2例に知的障害、2例に発達障害を認めた。特別支援教育は未だ十分に整備されていないため、障害を抱える子どもたちの学ぶ環境整備が課題であると考えられた。

石巻市の被災児童に発症する精神障害の有病率に関する研究

石巻市立石巻中学校、石巻市立門脇中学校を調査対象とし、調査票を配布・回収後、7月11日から15日に、スクリーニング面接及び構造化面接を行った。調査結果に関しては、17th European Society for Child and Adolescent Psychiatry（2017年7月, Geneva）、第58回日本児童青年期精神医学会総会（2017年10月, 奈良）にて発表予定。

外傷（トラウマ）を受けた子どもの治療技法の有効性に関する研究

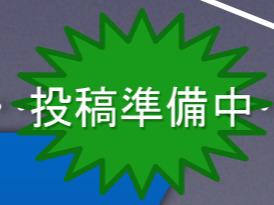
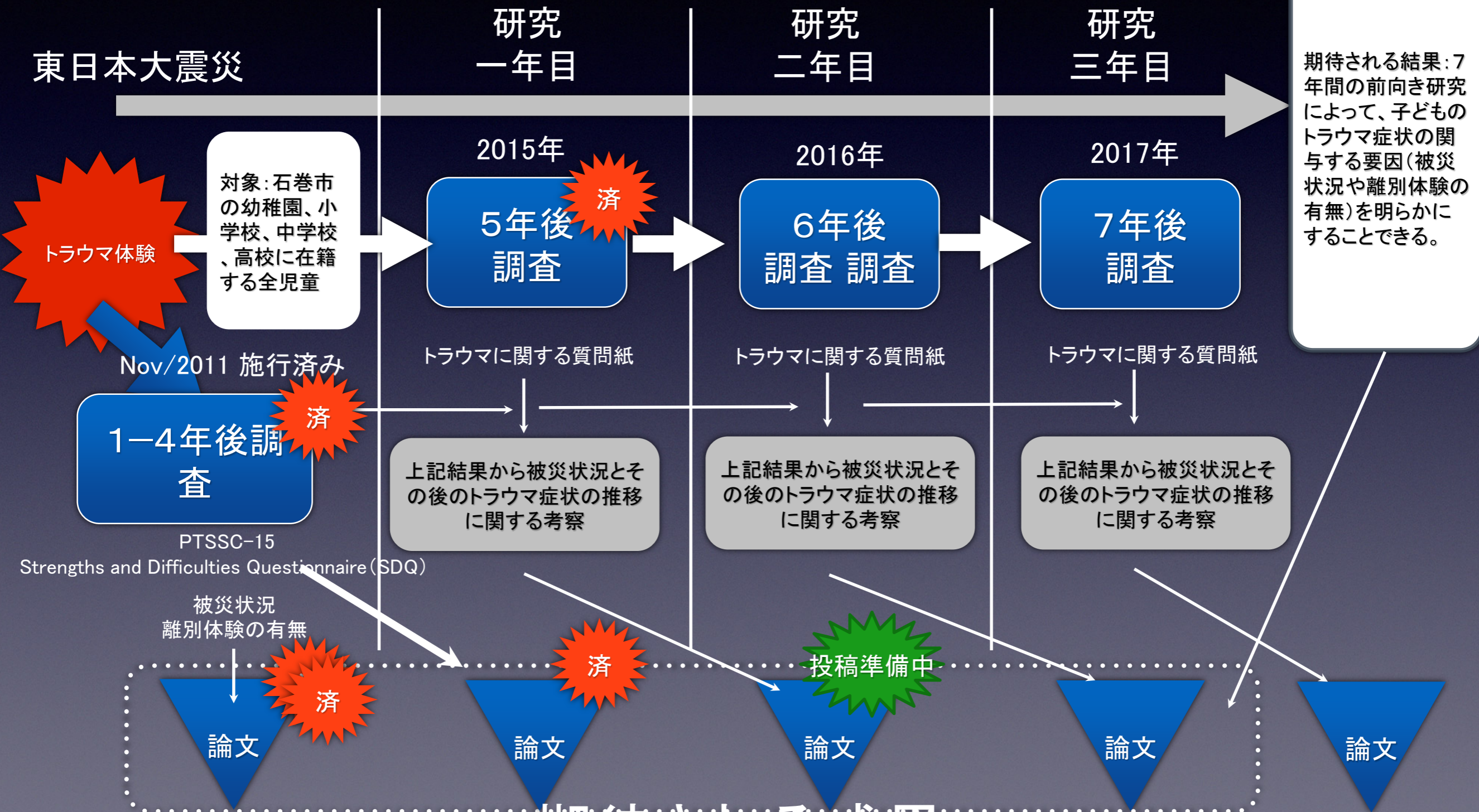
現在までにTF-CBTのIntroductory trainingを全受講者が受講を完了した。2015年9月に倫理委員会の審査を完了し、Peer consultationを開始している。2016年12月、2017年1月にWeb Consultaionを行った。現時点で5症例を行っている(完了3例 中断2例)。第58回日本自動青年期精神医学会総会（2017年10月, 奈良）で報告予定。

石巻市の被災児童の心的外傷に関する横断研究

分担研究者：宇佐美政英

目的：被災児童のトラウマ症状の推移とその予測因子を明らかにすること

東日本大震災



本年度の成果

アジア児童青年精神医学会@インドネシア
発表予定 2017年8月

論文
投稿準備中

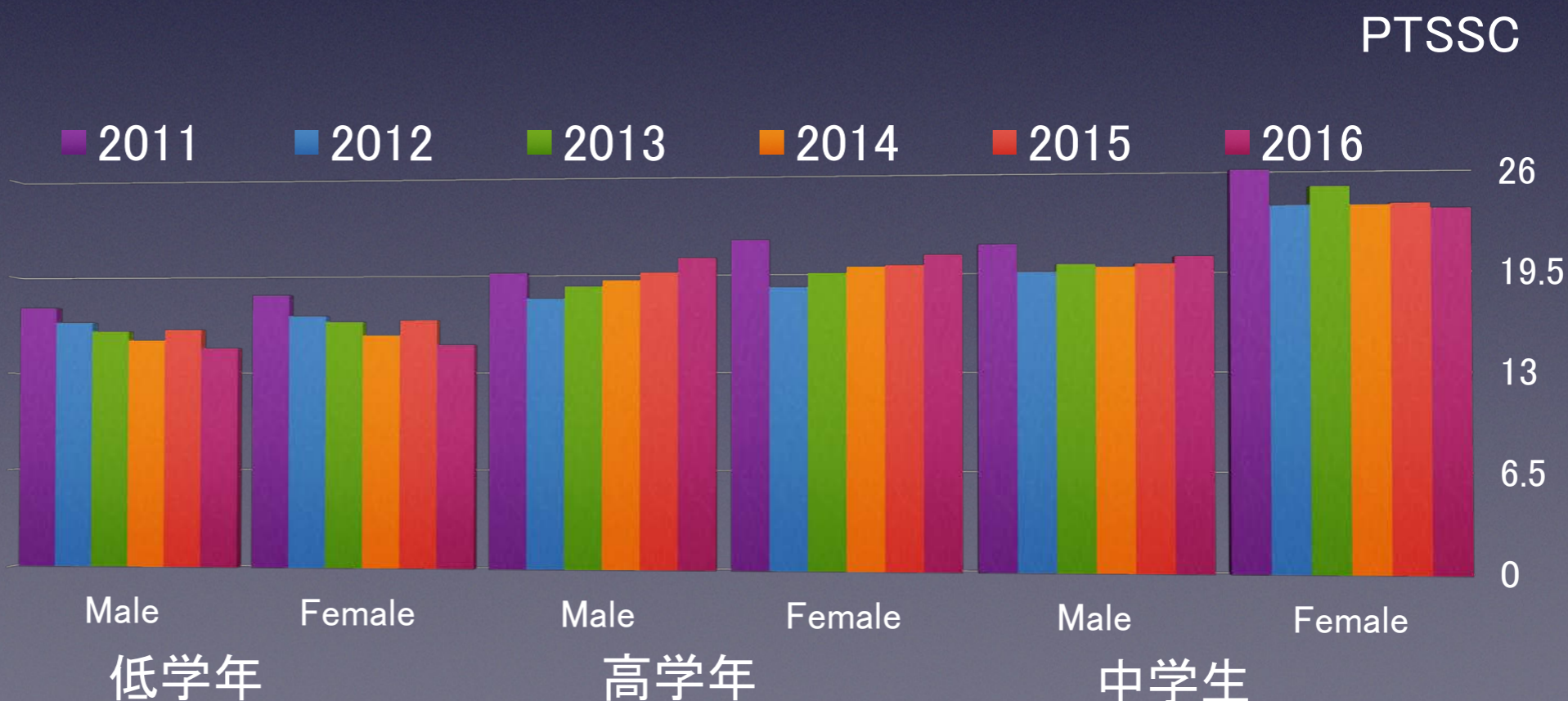
Method: The study comprised six groups. The first comprised 13,353 kindergarten, elementary school, junior high and high school children in Ishinomaki City, Miyagi Prefecture, Japan, who were evaluated 8 months after the disaster. The second, third, fourth, fifth and sixth comprised 12,947, 12,470, 12161, 11836, and 11468 children from the same place who were evaluated 20, 30, 42, 54, and 66 months after the disaster.

Results: The PTSSC-15 score was significantly higher in junior high school girls than in boys. The PTSSC-15 score was significantly higher in 4th-6th grade girls than in boys at 2011. 1st-4th grade boys and girls evaluated at 2012, 2013, 2014, 2015 and 2016 had a significantly lower PTSSC-15 score than those evaluated after 2011. 4th-6th grade girls evaluated at 2012, 2013, 2014 and 2015 had a significantly lower PTSSC-15 score than those evaluated after 8 months. 7th-9th grade boys evaluated at 2012, 2013, 2014, and 2015 had a significantly lower PTSSC-15 score than those evaluated after 2011. Seventh-9th grade girls evaluated at 2012, 2013, 2014, 2015 and 2016 had a significantly lower PTSSC-15 score than those evaluated at 2011.

Conclusions: We conclude that traumatic symptoms and daily life activity of children who survived the earthquake and tsunami improved over time.

PTSSC-15を用いた調査から、災害後の子どものトラウマ反応は継時的な変化を認め、2年以内には改善傾向を示すことが明らかになった(学会発表・投稿準備中)。

また、SDQを用いた調査から親から見た震災後の子どもの優しさなどの向社交性も震災前と比較して変化がないことが明らかとなった(論文作成中)。



「外傷体験を受けた子ども達における治療についての研究」

TF-CBT (Trauma-focused Cognitive Behavior Therapy) の効果実証研究

【目的】

Deblinger, Cohen, Mannarinoらによって開発されたTrauma-Focused Cognitive Behavior Therapy(TF-CBT)は、欧米のいくつかのPTSD治療ガイドラインにおいて有効であるとされている。国際トラウマティック・ストレス学会 (International Society for Traumatic Stress Studies ISTSS, 2009)、米国児童青年精神医学会 (American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, 2009) のガイドラインでは、子どものPTSD治療の第一選択であるとされており、英国・国立医療技術評価機構 (National Institute for Clinical Excellence NICE, 2005) も、性的虐待に対するTF-CBTの有効性を認めている。米国国立犯罪被害者研究治療センター (National Crime Victims Research and Treatment Center) と性暴力とトラウマティック・ストレスセンター (Center for Sexual Assault and Traumatic Stress) により発行されている「身体的性的被虐待児のための治療ガイドライン」では、さまざまな治療プログラムの中で唯一「十分支持される有効な治療法」として位置づけられている。また最近では、自然災害やテロの被害、DV被害や外傷性悲など、複合的な心的外傷を体験した子どもたちにも適応されており、効果が実証されている。しかし、TF-CBTのわが国での実践はまだほとんどなされていないのが現状である。

本研究では心的外傷における新しい治療をわが国において発展させるため、TF-CBTを実践しその有効性を検証するものである。

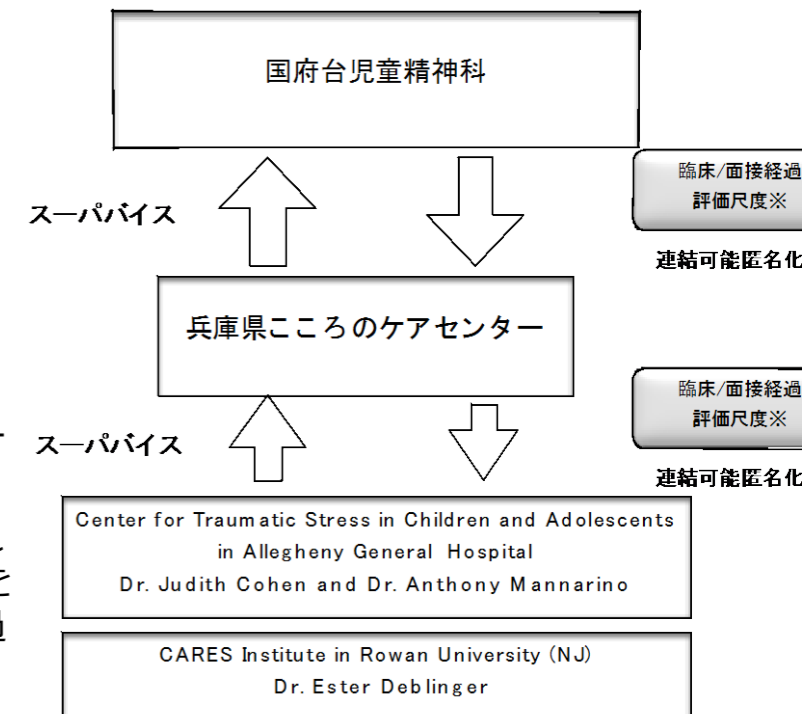
【方法】

米国国立子どものトラウマティック・ストレス・ネットワークが発行している「TF-CBT実践マニュアル」で推奨される方法で実施する。すなわち、治療マニュアルとして推奨されている「Treating Trauma and Traumatic Grief in Children and Adolescents」、およびWeb Training (TF-CBT web, <http://TF-CBT.musc.edu/index.php> 2005.) に基づいて本治療を実施する。

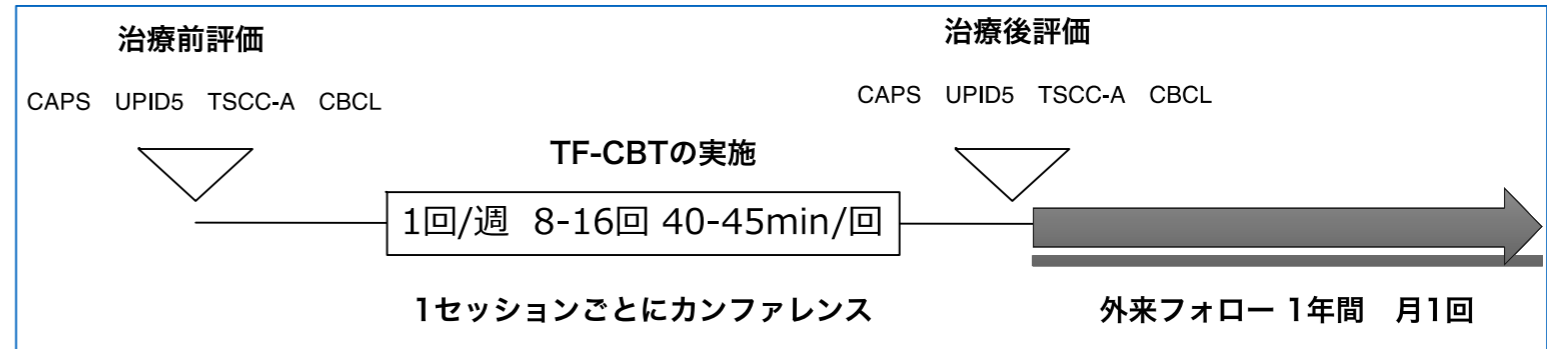
TF-CBTは心理的外傷体験をもつ子ども達の支援プログラムであり全体で8-16セッションを施行する。1セッション40-45分の治療時間を要する (TF-CBTに関する治療内容および治療の流れについては別添2資料を参照)。

尚本研究はプログラム開発者の一人であるDr.DeblingerからLive training (2011年7月、米国ニュージャージー州、CARES Institute(Child Abuse Research Education & Service)) を受け、わが国でTF-CBTの臨床実績のある兵庫県こころのケアセンター児童精神科 亀岡智美医師よりスーパーバイズが行われる。これはTF-CBTの治療をより正確かつ公正に行うためのものである。

その際には暗号化されたファイルで症例経過や面接記録を送信しSkypeなどでスーパーバイズを受ける。それに加えて、TF-CBTの開発者(Dr.Deblinger, Dr. Judith Cohen and Dr. Anthony Mannarino) らと緊密に連絡を取りながら、ケース進行中に必要に応じてスーパービジョンを受ける予定である。プログラム実施のすべての過程において、対象の安全に細心の注意を払い慎重に実施する。また治療終了後一年間の間月に1回程度のフォローアップを月1回の頻度で行う。



TF-CBT実施前後に次の評価尺度を適宜組み合わせて、PTSDおよび関連障害の症状改善度を評価する。以下の評価尺度をTF-CBT施行前と施行後にそれぞれ行う。①UPID(UCLA PTSD Index for DSM-IV)②TSCC-A (Trauma Symptom Checklist for Children-A) ③CBCL (Child Behavior Checklist) またセッション毎にSpence Children's Anxiety ScaleとBirleson's depression self-rating scale for childrenを施行する



【現在の進行状況】

現在までにTF-CBTのIntroductory trainingを全受講者が受講を完了した。2015年9月に倫理委員会の審査を完了し、Peer consultationを開始している。2017年3月にWebConsultationを行った。

現時点で5症例を行っている(完了3例 中断2例 進行中1例)



【症例】

症例	年齢	入院/外来	性別	診断	トラウマの種別	UPID得点	進行状況
症例1	13歳	入院	女兒	複雑性PTSD 愛着障害	家庭内暴力の目撃 身体的虐待	49	PRACまで施行し一時中断
症例2	15歳	外来	女兒	複雑性PTSD	家庭内暴力の目撃 身体的虐待	34	完了
症例3	15歳	外来	女兒	複雑性PTSD	医療行為 スポーツ外傷	40	主治医異動のため一時中断
症例4	13歳	外来	男児	複雑性PTSD	自然災害 (地震)	34	完了
症例5	15歳	外来	女兒	複雑性PTSD	自然災害 (地震)	34	完了

東日本大震災における被災児童の前向き追跡研究および被災児童の心的外傷後ストレス障害（PTSD）に関する研究-支援を行った被災児童の追跡研究-

（稲崎久美：NCGM国府台病院児童精神科）

《 I 》 研究概要

- 1) 背景・目的：石巻市は東日本大震災で甚大な被害を受けた地域であるが、児童精神科医療の資源は乏しく、入院治療施設も少ない地域である。子どもの支援には、医療機関だけではなく、学校などの教育機関や児童相談所などの福祉との連携が不可欠である。東日本大震災に被災した児童を支援し追跡することを目的に、平成24年度より「石巻市子ども支援関係者会議」を立ち上げた。「子ども支援関係者会議」の目的は、石巻市の問題を抱える子どもへの支援を行うために関係する諸機関が集まり、問題を抱える子どもや家族に関する情報交換を行い、よりよい支援を検討し提供することである。
- 2) 「子ども支援関係者会議」は、月に1回開催している。ケースによって必要な関係者（児童相談所、石巻市内の小・中学校教諭、石巻市教育委員会指導主事・スクールソーシャルワーカー、石巻市健康推進課保健師、石巻市市民相談センター、石巻市虐待防止センター、国府台病院・精神神経医療研究センター病院の児童精神科医・精神科医・ソーシャルワーカーなど）が参加した。非行の問題に関しては、石巻警察署が参加することもあった。

《 II 》 実施内容

平成28年度「子ども支援関係者会議」は9回開催され、延べ16名（8事例）について検討を行った。本年度に検討した事例の特徴として次のようなことが挙げられた。

①被災したのは8事例中2例だった。うち1例は母が津波に流されそうになったことをきっかけに分離不安症状を呈しており、震災関連症状と考えられた。

②8事例中4例で親に精神疾患があり、1例に深刻な貧困があった。8事例中3例は母子家庭であった。これらの機能不全家族からの事例では、地域の医療機関、行政機関、児童相談所などとの情報共有および継続した支援の検討が必要となり、月をまたいで複数回の検討（3回2事例、4回1事例）を行った。今後もこのような機能不全家族からの、地域全体での関わりと支援を必要とする対応困難な事例の増加が予想された。

③8事例中2例に知的障害、2例に発達障害を認めた（重複なし）。特別支援教育は未だ十分に整備されていないため、障害を抱える子どもたちの学ぶ環境整備（支援級／通級の増設、支援級教諭の専門性向上のための研修会など）が喫緊の課題であると考えられた。

《 III 》 次年度に向けた方針

- 1) 国府台病院による支援活動期間終了後に、地域の精神科医や小児科医が「子ども支援関係者会議」のスーパーバイザーの役割をとれるよう、本会議への参加を呼びかけ支援していく。
- 2) 今後、要保護児童対策地域協議会と一体化を図り、虐待を受けている子どもを始めとする要保護児童への支援の拡充や、医療を必要とする子どもを速やかに医療に繋がられるよう取り組んでいく。

宮城県石巻市における東関東大震災 被災児童（小学生）の追跡調査

【目的/調査内容】

本研究は東日本大震災の被災を経験した石巻市内における小中学生年代の子ども達と千葉県内の公立小中学生の子ども達との健康状態を比較するものである。調査尺度としては子ども版災害後ストレス反応尺度(PTSSC-15)と、生活習慣調査（睡眠時間および朝食摂取の有無について）を用いる。時間の経過、発達にともなう得点の推移、傾向の記述を行う。これは、過去に石巻市で得られた震災からの時間経過に伴う得点の推移が（Iwadare,et al.,2014; Usami,et al.,2014）、被災からの時間の経過によるものなのか、発達に伴う通常の変化なのかを検討するためである。非被災地において同じ質問紙を用いた調査を3年間継続して実施することで、得点の推移、傾向を記述し、以下の点を比較する。

1).子どもの自己評価によるストレス反応（PTSSC-15）の得点の推移 本尺度はPTSD（8項目）と「抑うつ（7項目）」の2つの下位尺度から構成され、心的外傷後ストレス障害(post traumatic stress disorder : PTSD)だけに限定されない反応がスクリーニングできる。**2).【生活習慣調査】**「睡眠習慣」および「朝食摂取の有無について」の新たに作成した質問紙を使用する。

【調査対象】

石巻市：小中学生全数調査

千葉県市川市：1年目に小学4年生と中学1年生を対象とし、3年間追跡する。

【結果①:2016年度調査】

	Number of Targets		Questionnaire recoveries		Numbers responded	RR(%)			
	n	%	n	%			Male	Female	Total
th grade	1104		1100		1034	93.66			

朝食未接種率

【結果②】

PTSSC-15

	Ishinomaki (n=1034)				Ichikawa (n=2141)				p value
	Mean	SD	Mmedian	IR	Mean	SD	Mmedian	IR	
PTSCC_Total	21.58	14.48	21.00	9.00-32.00	18.63	12.88	17.00	8.00-28.00	※※※
PTSD_factor	13.32	9.07	13.00	6.00-20.00	10.83	8.13	10.00	4.00-16.50	※※※
Depression_factor	5.48	4.51	5.00	2.00-9.00	4.46	4.03	4.00	1.00-7.00	※※※

Mean SD Mmedian IR Mean SD Mmedian IR p value

0 ※※

睡眠習慣

小学校4年

Sleep Duration

	Ishinomaki (n=1034)				Ichikawa (n=2141)				p value
	Mean	SD	Mmedian	IR	Mean	SD	Mmedian	IR	
Weekday	537.70	44.57	540.00	510.0-555.0	535.60	40.36	540.00	510.0-540.0	ns
Holiday	540.00	88.14	540.00	510.0-600.0	571.10	66.66	570.00	540-600	p<0.001

Bed Time

	Ishinomaki (n=1034)				Ichikawa (n=2141)				p value
	Mean	SD	Mmedian	IR	Mean	SD	Mmedian	IR	
Weekday	21.34	0.68	21.00	21.00-22.00	21.59	0.65	21.50	21.00-22.00	p<0.001
Holiday	21.91	1.01	22.00	21.00-22.00	22.02	0.80	22.00	21.50-22.50	p<0.001

Wake-up time

	Ishinomaki (n=1034)				Ichikawa (n=2141)				p value
	Mean	SD	Mmedian	IR	Mean	SD	Mmedian	IR	
Weekday	6.30	0.55	6.00	6.00-6.66	6.51	0.49	6.50	6.00-7.00	p<0.001
Holiday	7.23	1.45	7.00	6.00-8.00	7.54	1.13	7.50	7.00-8.00	p<0.001

中学校1年生

Mean SD Mmedian IR Mean SD Mmedian IR p value

1139)

Ichikawa (n=1455)

【本年度の成果】

小学生では被災地（石巻市）でPTSSC-15の総得点が高い。中学生では被災地（石巻市）と非被災地（市川市）に差はなかった。朝食摂取率は被災地（石巻市）で高かった。睡眠習慣では被災地（石巻市）と非被災地（市川市）で特記すべき特徴を認めなかった。被災地では生活習慣の乱れがあり、被災地の外傷体験は小学生で高い傾向にあると考えられる。

被災地の保健行政からみた被災児童の精神保健に関する研究

分担研究者：佐竹直子(国立精神・神経医療研究センター病院精神科)

研究成果 :本分担研究では、先行研究(国際医療開発研究事業渡部班H25-27年)に続き、東日本大震災によって被災した宮城県石巻市(以下同市)在住の児童の精神保健的な問題への保健行政による関与についての実態把握と、母子に対する地域支援ネットワーク、特に学校と保健行政の連携に注目した連携システムの構築について、更にメンタルヘルスについて問題を抱える児童の早期発見のためのスクリーニングツールの作成とその効果判定の研究を3年間実施する。

今年度は前年度と同様、行政にて把握・介入したメンタルに問題を抱える児童または母親の実態把握、地域支援ネットワーク会議への参加とスーパービジョン、スクリーニングツールを利用したリスクが疑われる児童の把握をおこなった。

I メンタルヘルスに関して介入が必要とスクリーニングされた被災児童及び母親のケースの実態把握とフォローアップ

昨年度同様石巻市虐待防止センター(以下同センター)の保健師をゲートキーパーとして、同センターだけでなく、市役所の各部署からアセスメントや介入を依頼される児童および母親、家族についての実態調査を行った。今年度相談内容については、子どものケースが12件、親のケースが1件、関係者会議に対するスーパービジョンが4件であった。うち、要保護児童対策地域協議会(以下要対協)に関するケースが4件と前年度に比べ半数に減っている。この要因として、要対協や石巻市こども関係者会議等で、すでに支援体制が確立され対策が検討されるようになったことが考えられる。また高校生の相談ケースが5ケースあり、これまで中学生以下の支援体制を構築してきた中で、その対象にならない年齢層への支援サービス不足のあらわれと考えられ、今後この年齢層に対する支援体制の検討が必要と思われた。

Ⅱ メンタルヘルスに問題を抱える児童の早期発見に関するスクリーニング

同センターがストレスを抱えて悩む子供たちの早期把握に努めることを目的にH25年度より同市内の小学生に対して日常生活調査が開始となり、先行研究から継続してスクリーニングツール(修正版QCD(自記式))の作成と調査結果の分析を共同で行なってきた。これまで約2300名の児童を対象に調査を実施し、今年度も市内7小学校計785名に対して調査を行った。

生活上の困難度を表す総得点の平均は25年度35.1、平成26年度30.9、平成27年度30.7とより年々低下してきていたが、今年度は31.2と若干の上昇がみられた。これまで震災から時間が経過し生活再建が進む中で、子供のストレスも軽減してきていると考えられていたが、新たな問題が出現している可能性もあり、来年度の調査結果を見て検討をおこないたい。

また相談を希望する児童の総得点は高い傾向がみられ、生活への満足度が低い傾向がみられる。さらに生活全体の満足度(学校・家庭)が相談希望の児童の方が有意に低い傾向にあるという結果が得られた。来年度、5年間の結果を集計し、スクリーニングツールとしての妥当性について最終検討を行う予定である。

カウンセリング希望のあった児童は15名(男子7名、女子8名)で、相談内容は学校での友人関係、親、兄弟間の葛藤などが多かった。

Ⅲ 同市における母子のメンタルヘルスに関するネットワークの構築

母子のメンタルヘルスに関するネットワーク構築について、先行研究にて平成24年度に設置した同市学校教育課が主催の「石巻市子ども関係者会議」と要対協ケース会議、2つの会議に参加し、ケースに関するスーパービジョンを行いつつ、包括的なネットワークについて検討をおこなった。学校、行政各部署での連携は年々スムーズに実施されるようになってきており、特に学校側の積極的なネットワークへの参加がみられるようになってきている。さらに、今年度からは、母子だけでなく家族全体として問題を抱えるケースが増えてきていることもあり、地元の家庭医と地域包括センターのワーカーにも参加をお願いし、学校、行政、福祉、医療とネットワークの充実化を図った。

研究発表及び特許取得報告について

学会発表

タイトル	発表者	学会名	場所	年月
Child Survivors Struggle with Peer Relationships 42 Months after the Great East Japan Earthquake:Series of Questionnaire-Based Cross-Sectional Surveys	Usami M, Iwadare Y, Ushijima H, Tanaka T, Watanabe K,	International Association of Child and Adolescent Psychiatry	Calgary	2016.9
東日本大震災後の子どものこころのケア活動	宇佐美政英	社会精神医学会	東京	2016.1

その他発表(雑誌、テレビ、ラジオ等)

タイトル	発表者	発表先	場所	年月日

特許取得状況について ※出願申請中のものは()記載のこと。

発明名称	登録番号	特許権者(申請者) (共願は全記載)	登録日(申請日)	出願国

※該当がない項目の欄には「該当なし」と記載のこと。
 ※主任研究者が班全員分の内容を記載のこと